

秀賞

自分を超越る1秒の挑戦

秋田県北秋田市立鷹巣中学校

3年 佐藤 綾彦

「何のために走るのだ。」メロスが友情と信念のために。そもそも走る理由とは。実は走ることのほとんどは、苦しいのだ。降りしきる雨、灼熱の太陽、あるいは極寒の吹雪の中という自然との闘い。楽をしたい自分との闘い。ぼくがやっとの思いでタイムを伸ばしても、ライバルがさらりと上をいく現実。心に心が折れかける。

では、ぼくは何のために走るのか。その答えは五里霧中だ。中学校に入学し、小学校で続けてきた野球ではなく、ゼロからのスタートである陸上長距離を選んだぼくの挑戦。特に、初めて出場した駅伝は、とても苦い思い出だ。チームは県大会を勝ち抜いて東北大会に出場できたが、ぼくはタイムが伸びなかったせいで県大会を走れず、先輩やチームに全く貢献できなかったからだ。チームのキャプテンが最後のミーティングで語った言葉が忘れられない。「後輩たちが待っていると思うと足が前へ前へと進んだ。楽しかった、ありがとう。」ぼくははっとした。足をひっぱったぼくたちを責めるのではなく、後輩への感謝の気持ちを忘れず、チームのために全力を出し切った先輩はかっこよかった。ぼくも来年は後輩のために全力を尽くせる先輩になりたい、初めて心から思えたのだった。「1秒を削り出せ」これがチームの合言葉になった。また、先輩から全中という大会があることを聞いた。全中とは全国大会のことで、神がかったような速いタイムを突破することで出場できるらしい。ぼくに「全中に出場してみたい」という漠然とした目標ができた。

2年生に進級すると後輩ができ、少し体力とスピードがついてきた実感があった。「やってもできない」ことが周囲に知られるのは怖い。しかし、それを自覚することはもっと恐ろしいことだ。ぼくはこれまで、レースに負けてもテストで結果が出なくても、何かと理由を付け、結局自分を納得させてきた。迎えた全県大会。「2分8秒」自分に突き付けられた結果だ。ところが、この年、タイムを縮めようとレースを何度走っても同じタイムしか出せなかった。壁というものの存在を感じて恐ろしくなったが、「2年生だから仕方がない。」と強がってみせた。全中まで8秒という途方もないタイムを縮める必要があった。

そんなぼくが奮起したのは、仲間やライバルの成長だった。見えない努力を重ね、タイムを伸ばす仲間の活躍を素直に喜べなかったぼくに、彼らは「ナイスラン」と、いつも声をかけてくれた。彼らに負けたくない気持ちが芽生えた。

タイムを縮めるために何ができるのか、ぼくが導き出した答えは、努力だった。冬の間、地味な体幹や筋肉を鍛えるトレーニングを行うことに決めた。疲れて眠い日ややる気のでない日でも「1秒を縮めるため」と自分に何度も言い聞かせ、こつこつ取り組んだ。ぼくの中に核のようなものが生まれた。

3年生に進級し、ラストシーズンを迎えた最後の全県総体。1年前の「2分8秒」が脳裏に浮かんた。「絶対大丈夫だ」ぼくは積み重ねてきた努力を信じ、スタートラインに立った。「パン！」勢いよく地面を蹴り、スタートした。1周目、体はよく動いている。2周目にさしかかる。足が動かなくなってくる。ラストスパート、あとは力を振り絞るだけ。ゴール、タイムは1分59秒99。今までやってきた努力が報われた瞬間だった。

何のために走るのか、霧の中にいたぼくの心はすっきりと晴れ渡っていた。そうか、トラックや駅伝の区間を走るの是一人だけれど、心の中には仲間や家族がいて、その応援に応えようとする気持ちが走る理由なのだ。陸上は個人競技だけれど、練習ではぼくが走ると仲間が声をかけて励ましてくれた。そして、ぼくもチームが元気になるように声をかけてきた。陸上とは、仲間や家族に支えられて一緒に成長していくものだということに、気付くことができた。仲間、コーチや先生、家族、たくさんの人に支えられて練習を続け、タイムを伸ばすことができた。ぼくはこれからも感謝の気持ちをもって走り続ける。そして、1分1秒を削り出すために努力を続け、挑戦を積み重ねていきたい。

強さが生まれるときには弱さを乗り越えなければならない。その原動力は、大切にしたいものや守りたいものへの思いである。さらに、「自信をもって進む」自分への思いもとても重要なのではないか。ぼくは、仲間、応援してくれるみんな、努力してきた自分のために、これからも強い思いで走り抜きたい。

8月沖縄、ぼくは全中の舞台に立った。もう何の迷いもなく、全力で駆け抜けた。